（別紙６－２）

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

【研修参加者】

所 属（学部（研究科）・学年）：農学部・4年

氏 名：上村理子

授業科目名	国際森林論

1．研修先での学習内容及び自身の学習成果について記載して下さい。（250～300字程度）

今回の研修ではドイツにおける林業の現状を知ること、より実践的な英語コミュニケーションを行うことが目的とされていた。専門的な視察では、ロッテンブルク林業大学の先生による講義や現場で実際に働いている方々によるお話などを聞くことができた。ドイツのほうがより機械化が進んでいる点や地形や植生、環境問題への意識などの日本との®違いや、キクイムシによる被害が多いことや働き手が少なくなっている点など、日本と同じく解決すべき問題も多いことを知ることができた。英語による講義は、言葉だけでなく孔子のジェスチャーなどに意識を向けることでより理解が進むことに気づくことができた。

2．現地での生活を体験して得た気づきや学びを記載して下さい。（250～300字程度）

ドイツでの生活で一番驚いたことは電車の運行についてだった。日本だとほぼ定刻通りに運行され、駅に改札があるところが多いと思われるが、ドイツ滞在中は電車が時間通りに来ることはなかったし、駅に改札はなくそのまま乗るところが多かった。調べてみると、インフラ設備が十分に整備されていないところもあるといった内容を見ることもあったため、日常で使用している日本のインフラがとても整備されているものだと気づかされた。また、観光地や店における英語の普及率が高く、簡単な英語が使えれば、有名な観光地なら問題なく行動できることも留学して気づいたことだった。

3．研修前と後での自身の変化や最も成長した経験について具体的なエピソードをもとに記載して下さい。（250～300字程度）

研修前後で一番成長したことは、英語をただの言語ではなく、コミュニケーションツールの一つであると気づくことができたことである。研修の初期では、自分の英語力に自信がなかったため、講師の話を聞きメモを取るのが精いっぱいであり、内容を理解することがとても難しかった。そのため、あまり質問などをすることができなかった。しかし、講義の際に講師の近くで話を聞いた際、ジェスチャーなトーンなども合わせてみることで内容がなんとなくわかるようになり、質問したいことを見つけることもできた。今まで言語としての英語に苦手意識を持っていたが、この一件で英語に対するハードルが下がり、自信をもって英語と触れ合えるようになった。

4．地域社会の発展に寄与するため、今後取り組んでいきたいこと、自身の目標について記載して下さい。（250～300字程度）

今回の研修で私は、自分が住んでいる地域についてもっと知り、かかわる必要があると思った。講義を聴いているときに、自分は専門的な分野において日本についての情報を十分に理解できていないと感じることが多かったためである。地域社会の発展には、その地域のことや置かれている問題、現状について知っていることが重要である。そのため、私はボランティア活動などの体験的なかかわりや、地域における林業の実態について学ぶなど、自分から積極的に学ぶための活動をしていきたいと思っている。そして、自身の専門分野を生かして、地域に還元していくことを目標としたい。

（別紙６－２）

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

【研修参加者】

所 属（学部（研究科）・学年）：農学部・４年

氏 名：大園和馬

授業科目名	国際森林論

１．研修先での学習内容及び自身の学習成果について記載して下さい。（250～300字程度）

自分の専門分野である日本の林業とドイツの林業の違いは何かを学んできた。日本は急峻な地形が多く、大型機械が導入しにくいがドイツは森林といっても日本のように山にあるばかりではなく、平坦な場所や丘のような場所にあるため大規模な林業が行いやすいのである。また、ドイツは災害が少なく、長期的な樹木の育成が可能であり、日本では50年生で伐採してしまうがドイツでは100年生から200年生の樹木もある。さらに、ドイツは日本のような多種多様な下層植生がなく下刈りをする必要がなく、日本に比べてコストもかからない。そのため、木材の純利益が大きくなるという違いがあった。

２．現地での生活を体験して得た気づきや学びを記載して下さい。（250～300字程度）

ドイツは環境先進国として知られている。しかし、実際に現地を訪れてみると路上喫煙は誰でもしているし、ごみ箱や灰皿が街中のそこら中にもあるのにも関わらずポイ捨ては日常茶飯事であった。もちろん、地域によってはごみが落ちていない都市もあったが、これが環境先進国なのかと疑問に思った。他には、ドイツの日曜日は休むというのが国民に定着しており、お店が閉まっていることや掃除機をかける音すらも注意される。現地の人は老若男女問わず、サイクリングをしていたりジョギングしていたり、芝生で寝ている人たちが多くいた。国全体で休もうという雰囲気があるのは日本には感じられないものだった。

３．研修前と後での自身の変化や最も成長した経験について具体的なエピソードをもとに記載して下さい。（250～300字程度）

留学のもう1つの目的として英語でのコミュニケーションがあった。スピーキングなど全くやったことがなく自分の英語がどこまで通じるのか試してみたかった。現地に着いた当初は綺麗な文法や言葉で伝えようとしてうまくいかなかった。しかし、滞在していたホテルで同年代の現地の学生と交流があった。彼は英語圏の人間ではなかったがスラスラと英語を話していて自分との差を感じた。同年代ということもあり、親近感を感じたのか私は綺麗な英語というよりも相手に伝わりやすいように身振り手振りを加えて話すと思うっていた以上に相手に伝わり会話ができた。文法が正しくなくても工夫をすれば話せることを知った。とてもいい経験だった。しかし、痛感したことは単語力の問題と発音の問題だった。日本に帰国してからも留学生と交流したり、英語の勉強に取り組みたいと思っている。

４．地域社会の発展に寄与するため、今後取り組んでいきたいこと、自身の目標について記載して下さい。（250～300字程度）

上記で記した通り、ドイツの休日の過ごし方はとても印象に残った。しかし、これを日本で同じように実施することは難しいことも事実である。２週間という短い間であったため知識不足なだけかもしれないが、日本とドイツの違いは、ドイツは家族や個人で過ごすことが多いが日本は地域ごとに行事があるということだ。子供からお年寄りまでだれでも参加ができ、伝統行事や地域固有の行事をする。しかし、少子高齢化も進み衰退している地域もすくなくない。地域社会の発展には地域内の関りが重要だと私は思う。そこで、私たち大学生が率先して地域行事やボランティア活動に参加して橋渡しになっていきたいと考えている。

（別紙６－２）

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

【研修参加者】

所 属（学部（研究科）・学年）：農学部・4年

氏 名：佐田光月

授業科目名	国際森林論

1．研修先での学習内容及び自身の学習成果について記載して下さい。（250～300字程度）

現地の林業労働や大型林業機械、ドイツ特有の広葉樹林、針葉樹林を見学した。また、環境都市としてのフライブルグやヴィムツィンゲン、鉱山、環境教育についても見学した。個人的には林業の労働環境について学べてとても良かった。現地の初任給はおよそ36万円で、物価と比べると日本と同じ厳しい条件だと感じた。また昼の短い冬はライトをつけて作業をする事、林業会社同士で外部に事業を委託するところなどが特殊だと感じた。環境教育に力を入れている点も注目した。バルトハウスという児童向けの環境教育施設では、幼少期に自然や地域にふれることの重要さを教えていただいた。幼少期から実験や自由な工作ができる場で、日本でそんな施設があれば良いと考えた。

2．現地での生活を体験して得た気づきや学びを記載して下さい。（250～300字程度）

現地での生活でまず困ったことが二点あった。1つ目が物価だ。円安の影響に加えて物価も高いと感じた。スーパーに行けばなんとか自炊はできたが、外食をすると昼食でも平気で3000円は使っていた。チップも1割ほど出していたので、現地で暮らすには相当なお金が必要だと感じた。二つ目が食文化だ。私は好き嫌いがないが、現地での朝食はボソボソのドイツパンにパサパサのチーズ、冷えたソーセージが出てくることが度々あった。塩辛いが素朴だった。海外生活では食文化が私にとってとても重要になってくることがわかった。現地で良かった点は、景観だ。街の建物はアパートのようなものや田舎の一軒家まで多くが伝統的でカラフルだった。また法律で屋根の色や畑に植えるものやその感覚まで決まっている都市もあり、景観の良い街づくりに力が入っていることを実感した。

3．研修前と後での自身の変化や最も成長した経験について具体的なエピソードをもとに記載して下さい。（250～300字程度）

自分は考えすぎてしまう性格で、悩みや憂鬱な時間が多い性格だ。フランクフルトに着いた時にはっとしたことがある。とても治安が悪い都市で、物乞いやドラッグをする人がそこらじゅうにいるような都市だった。こんなに苦しんでいる人に比べれば、自分の悩み事なんてとても些細なものだと思ったし、甘えて生きていることに気付かされた。綺麗事だが、そんな困った人に手を差し伸べられるような優しい人になりたいと最近考えるようになった。また、海外に行くハードルが大きく下がった。今までは行きたいがなんとなく怖いという心持ちだったが、今はどんなことが不安か明確になったので行っても対処できる気がする。卒業旅行はタイを計画している。

4．地域社会の発展に寄与するため、今後取り組んでいきたいこと、自身の目標について記載して下さい。（250～300字程度）

現地の林業を視察して、やはり日本の林業も明るいものになればいいと僕は思う。幸い林業に関係のある会社に入社予定なので、ドイツの林業で良かった点、安全対策や林業機械の使い方、広いコミュニティ、効率的な施業方法、新しい林業樹種などを取り入れていけるようにサポートしていきたい。また現地で見学した木造建築が非常に綺麗で印象に残っているため、木造建築について調べ、日本での活用法を見出したい。今の自分の目標は海外で林業関係の仕事に就くことだ。そのために今度は日本の林業についてしっかりと熟知して、海外の林業を発展させることができるような人材になりたいと思っている。また、日本においても自然との距離が近い人間として子供たちに何か自然に触れる機会を設けられる人になりたいと思う。

（別紙６－２）

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

【研修参加者】

所 属（学部（研究科）・学年）：農学部・４年

氏 名：首藤広大

授業科目名	国際森林論

1．研修先での学習内容及び自身の学習成果について記載して下さい。（250～300字程度）

ドイツでは、日本と気候や植生の違いから林業の行い方やそこに使われる機械などが異なることがわかりました。

まず日本と違い林道が非常に硬いため、重さに耐えられることから、非常に大型な機械が搬入されていました。そのため生産性も日本に比べて高い印象でした。また、稼働時間に関しても、日本よりもだいぶ長く使用されており、採算が合わないからということから、このように使われることもわかりました。

ドイツと日本では植生が異なり、種数は日本の倍以上多く、日本で問題となっている下層植生に関してもドイツはブナ、ナラ類が競争に負けないことで植栽を行わなくてもいいという利点があることを学べました。

2．現地での生活を体験して得た気づきや学びを記載して下さい。（250～300字程度）

今回初めて日本を出て海外にいき、日本語が通じない中で生活していくことは非常に心配が大きかったです。しかし生活していく中で、今まで中学から学んできた英語で軽くコミュニケーションをとることができ、今まで経験してこなかった文化について触れることができて、心配より楽しいという感情が多くなりました。また泊まったユースホテルや修道院では、同い年くらいの子や子供たちと遊んだり会話して行く中で共通部分や異なる部分など、日本いては気づくことができないことを多く気づかせてくれました。英語ができれば、世界中でコミュニケーションをとることができ、逆にできないと非常に厳しいことを体験できたのは大きい学びになりました。

3．研修前と後での自身の変化や最も成長した経験について具体的なエピソードをもとに記載して下さい。（250～300字程度）

母国の日本の治安の良さや何気なく過ごしていた日常が海外では大きく異なっていることを改めて実感することができました。

海外では非常に危険とされる地域が一つの町ごとに存在し、日本では考えられないほどのアングラ感を感じました。宿泊したユースホステルで出会ったトルコ出身の方の話では、トルコとドイツは基本的に過去の出来事などからお互いを嫌いあっているなど、日本ではそんなに感じることのできない民族や文化の違いによる対立について実際に話で聞くことができました。今回の体験から、日本の治安の良さや生活レベルの高さ、多文化への尊重などいろいろな面で先祖の方々が積み上げてきたものが大きいのだと気づくことができました。

4．地域社会の発展に寄与するため、今後取り組んでいきたいこと、自身の目標について記載して下さい。（250～300字程度）

自分を含めですが実際に海外にいきそこでいろいろな体験をすることで、多くのことを気づき、海外の素晴らしさだけでなく、母国への愛着や素晴らしさを再確認することができると感じました。ほかの人に話を聞くだけではなかなか気づけないことが多くあり、実際に行くことで学べることも多くあるので、できるだけ多くの人が海外に実際に赴きそこでいろいろ体験できる機会を増やしていくことが大事だと感じました。しかし、それは自分一人では非常に難しいことであるため、自分ができることは、今ある日本のいい文化を未来につないでいくことだと思うので、この文化を将来の子供や仕事で出会った若い世代などに伝えていきたいと思います。

（別紙６－２）

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

【研修参加者】

所 属（学部（研究科）・学年）：農学部・４年

氏 名：下門京嗣

授業科目名	国際森林論

１．研修先での学習内容及び自身の学習成果について記載して下さい。（250～300字程度）

研修先では主にドイツの森林の特徴や日本との違いについて学んだ。中でも、シュバルツバルト（黒い森）ではトウヒやモミ、ナラ、ブナなどの樹種を観測し、九州に住む私の肌間では日本の東北地方のようなバイオームだと感じた。その他にも、リスやクマゲラ、オオカミ、シカなどが生息し生態系を築き上げていることを学んだ。ドイツでも温暖化に対する生物多様性の影響が懸念され、ダグラスファーをはじめとする対策が行われていることを知った。また、森林以外にも地層や高性能林業機械、フライブルクをはじめとする街の特色、炭鉱など様々なことを学ぶ貴重な体験をさせていただいた。

２．現地での生活を体験して得た気づきや学びを記載して下さい。（250～300字程度）

まず様々な生活や文化の違いに驚いた。一つ目は気候である。非常に寒く、乾燥しておりプログラムの学生も何人か体調を崩すほどであった。私も朝方はのどが痛くなり、非常に悩まされた。二つ目に物価や金銭面での違いである。物価は日本の約1.5倍に感じ、トイレなどにお金をとられることに悩まされた。さらに驚いたのはフランクフルトとフライブルクなどの、都市と比較的田舎の方では物価に差が出るということだった。私が確認した中で、水や食料などが２～３倍以上都市が高かった。日本では最低賃金やインフラに違いはあれ、全国展開のコンビニやスーパーの値段がほぼ均一なことはすばらしいことだと感じた。

３．研修前と後での自身の変化や最も成長した経験について具体的なエピソードをもとに記載して下さい。（250～300字程度）

私が最も成長したと感じるのは、外国人とのコミュニケーションに対するハードルが低くなったことだ。私は日中の実習の時間以外でも、外国人の人と触れ合う機会が多かったように感じる。主に同じホテルにいた語学学生や、修道院にいたシスターや子供たち、また飲食店でほかのお客さんと仲良くなった。主にやり取りした言語は英語であり、ドイツ語は全く話せなかった。はじめは英語で会話することに抵抗があったが、話すうちに打ち解けることができ非常にうれしかった。私自身英語力が上がったとかそういう話ではなく、話そうという気持ちが大切だと感じた。複数人とは連絡先も交換でき、非常に良い経験となった。

４．地域社会の発展に寄与するため、今後取り組んでいきたいこと、自身の目標について記載して下さい。（250～300字程度）

私が今後取り組みたいと感じたのは、海外のボランティアやワークホリデイなどに参加することである。私の友人や後輩をはじめとする周囲の人も参加しており、その人たちは意外にもハードルが低いと口にしている。数年のホームステイや留学はハードルが高く、費用もかかるため抵抗があるため、数週間から数か月のボランティアなどから手を付けたい。またそういった機会を含め、さらに海外に行くべきだと感じた。私は海外に対するあこがれを持ちつつも、これまで行動できずにいた。これを機に、日本以外にも視野を広く持てる海外に積極的にいきたいと思う。

（別紙６－２）

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

【研修参加者】

所 属（学部（研究科）・学年）: 農学部・4年

氏 名: 新村日奈子

授業科目名	国際森林論

1．研修先での学習内容及び自身の学習成果について記載して下さい。（250～300字程度）

研修先のドイツでは現地の大学の先生方やその施設の方々にご教授頂き、ドイツの環境や自然、実際行っている施業などを学びました。座学での研修はほぼなく、実際に現地を見学することが多く現場の空気を感じることができました。また、日本とは全く違う環境でどのように自然と関わってきたのか、それに関わる人々はどのように働いているのかを知ることができました。特に現場の働き方や林業機械が印象に残っています。視認性の高い服装でチェーンソーを軽々と持っていて異国情緒を感じました。また、林道の道幅が広く戦車として使われているようなキャタピラを持っている大型の林業機械が動いている様子には驚きました。

2．現地での生活を体験して得た気づきや学びを記載して下さい。（250～300字程度）

ドイツでの生活で気づいたのは日本がいかに住みやすい国なのかということでした。ドイツでは水は硬水で水道からそのまま飲めず、飲み水をストックしておかねばならず、日本と比べて街には吸い殻があちこちに落ちていて、夜は一人で歩けないほど治安が悪いというのを体験しました。
しかし、景観は歴史的な建造物が多く街並みを見るだけで楽しめる場所が多かったです。歴史のある建物が多いだけにどうやって街がつくられたのか、どのような建築方法が用いられているかなどを記録しており、この歴史を保存するという姿勢は日本にも欲しいと感じました。

3．研修前と後での自身の変化や最も成長した経験について具体的なエピソードをもとに記載して下さい。（250～300字程度）

私は本屋のアルバイトをしているのですが、コロナ禍が明け海外のお客様が時々いらっしゃるようになりました。研修前は海外のお客様がいらっしゃるとどうしていいかわからずレジ作業に徹していたのですが、研修を終えた後はコミュニケーションを取ろうと前向きに接客することができるようになりました。海外では片言の英語でも話そうとすれば相手も聞いてくださり、コミュニケーションは関わろうとする態度が必要だということに気づくことができました。また、海外では店員さんとは挨拶をすることが普通なので、笑顔で挨拶することを心掛けて接客できるようになりました。

4．地域社会の発展に寄与するため、今後取り組んでいきたいこと、自身の目標について記載して下さい。（250～300字程度）

地域社会の発展には林業の成長産業化が必要になると考えます。そのため林業に関わる働き手を確保する必要があります。また、現場の働き手だけではなく製材業や建設業などの林業に関わる業種の働き手も必要になると考えています。林業に関わる仕事のイメージを良いものにするために、林業のイメージアップや作業の安全性向上を図る必要があります。林業のイメージダウンにつながっていることを改善するために林業の悪い面だけではなく魅力的な面があること、安全研修があること、林業機械が普及していることなどを伝えていくことに取り組みたいと考えている。

（別紙６－２）

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

【研修参加者】

所 属（学部（研究科）・学年）: 農学部　4年

氏 名: 永田凪斗

授業科目名	国際森林論

1．研修先での学習内容及び自身の学習成果について記載して下さい。（250～300字程度）

.研修期間中は、森林に行き植生や林業機械の見学。また、高層木造の建築物や自然保護センター、鉱山にも行った。日本と最も異なると感じた点は植生だ。ドイツは、日本と比べると植生が少なく、森林内でも下層植生が少なかった。下層植生が発達していないため森林内での作業が日本より簡単そうだと思った。高層の木造建築は上は住居、下はスーパーや幼稚園など効率の良い建物を建て、うまい土地利用を行うことで魅力的な街づくりを行うと同時に環境面にも配慮していて倉庫の上にも緑化、緑地を行い、雨水を吸収して、蒸発させ循環させることをしていた。建築物に使うも木材近くの山でとられた木材を使用するなどの工夫がされていた。

2．現地での生活を体験して得た気づきや学びを記載して下さい。（250～300字程度）

ドイツに着いてまず感じたことは、日本とは異なる街並みだ。高いビルのような建物はあまりなく中世的な古い建物が並んでいた。中には、屋根の色を統一している地域もあり散策しているだけで非日常を味わうことができた。また、街には教会が多くあった。次に、レストランに行った際、チップ文化というものを味わった。日本ではチップを渡す文化がないため、とても新鮮な体験をすることができた。自由行動では、世界最大のゴシック建築であるケルン大聖堂や旧バイエルン王国の宮殿であるミュンヘンレジデンツ、ビール祭りで有名なオクトバーフェストにも参加しドイツでしか経験できないような文化に触れることができた。

3．研修前と後での自身の変化や最も成長した経験について具体的なエピソードをもとに記載して下さい。（250～300字程度）

研修前後で自身が変わったと思うところは、新しいことに挑戦しようとする行動力だと考える。私自身簡単な英語しか話せないため、ドイツでは言葉がほぼ通じなかった。何かを注文するにも電車の切符を買うにも言葉が読めず、通じずで初めてのことばかりだった。それでも、身振り手振りや知っている簡単な英単語、携帯の翻訳アプリなどを使って伝える努力をした。伝わらないことも多々あったが、挑戦したことに意味があると感じた。また、現地で子供たちや学生と交流する機会がありコミュニケーションをとった。分かる範囲内で会話を楽しむことができた。

4．地域社会の発展に寄与するため、今後取り組んでいきたいこと、自身の目標について記載して下さい。（250～300字程度）

.研修を通して、日本とドイツの林業、植生の違いや似ている点について現地で見て、話を聞くことで学ぶことができた。日本とドイツは地形も植生も異なるためドイツの林業そのまま日本の林業に取り入れることはできない。しかし、ドイツの林業教育については日本より進んでいると感じた。教育に関しては、ドイツを参考に行うことができる。日本でも小中学生のうちからもっと森林と触れ合う機会を作り、少しでも林業という仕事に興味をもってもらうことで高齢化などにより不足している人手の確保にもつながると考える。私自身も春から県の林業職員として働くため、少しでも県の林業発展に貢献できればと考える。

（別紙６－２）

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

【研修参加者】

所 属（学部（研究科）・学年）: 農学部・４年

氏 名: 穂高響

授業科目名	国際森林論

１．研修先での学習内容及び自身の学習成果について記載して下さい。（250～300字程度）

ドイツの森林率は約30%で日本の森林率約67%よりも低い。主要な樹種はトウヒ、モミ、ブナで、黒い森ではトウヒが大量に人工樹林されていた。ドイツは、択伐しながら天然更新を促す林業が盛んであるという点で日本と大きく異なる。ドイツは下層植生が少なく、樹種の多様性が低いなどの理由から択伐が向いていることを学んだ。また、ドイツは、日本よりも傾斜が緩やかであり、路網密度が高いため、大型林業機械が多くの現場で利用されている。現場の方はドイツ語でドイツの林業を説明していた。全てを理解することはできなかったが、一部理解することができた。帰国後は、林業に関するドイツ語の専門用語を学び、様々な文献に触れたいと思った。

２．現地での生活を体験して得た気づきや学びを記載して下さい。（250～300字程度）

ドイツでは、治安が悪い地域がいくつかあり、用心しなければならなかった。特に、フランクフルト中央駅付近は、犯罪が多いため、行動するときには必ず集団で、荷物は前掛けで、夜20時以降は外を出歩かないようにした。ロッテンブルクでは、修道院に５日間滞在した。この期間に、風邪をひいてしまい３９℃の熱が出た。ドイツの９月中旬～下旬は深夜になると温度が急激に下がり(約５℃)、乾燥するため、寝間着に気を付けて過ごす必要があると思った。また、解熱鎮痛剤とのど飴を持っておくと、風邪・頭痛の症状と、喉の痛みを緩和することができるため、便利であると感じた。

３．研修前と後での自身の変化や最も成長した経験について具体的なエピソードをもとに記載して下さい。（250～300字程度）

研修に向けて、事前に英語とドイツ語を勉強しておくことで、ホテルでの手続きや、飲食店での会話で問題なく対応できるようにした。ドイツに渡ってからは、勉強の成果が生かされ、現地の方と問題なくコミュニケーションを取ることができた。全てを完璧に表現し、聞き取れたわけではないが、自分の言いたいことを伝え、相手の考えを理解しようと努力することができた。研修前は外国語を話すことに自信が無かったが、自分の英語・ドイツ語が通用することを実感し、自信がついた。視野を広げるために、外国の様々な背景を持った人とコミュニケーションを取りたいと思うようになった。

４．地域社会の発展に寄与するため、今後取り組んでいきたいこと、自身の目標について記載して下さい。（250～300字程度）

ドイツ研修では、フォレスターが子供向けの森林環境教育を提供する施設を訪れた。子供たちに対して、森を五感で体験し、人間の暮らしと森の関わりについて考える機会を与えている。幼い頃の自然に触れる体験がその後の発育に良い影響を与えるという報告から、ドイツでは森林環境教育が進んで行われている。学年が上がるにつれて、「森と温暖化」など、より専門的な内容になり、森での体験を踏まえた上での子供たちの積極的な意見交換が期待されている。私は、将来は国または県の林業職員として働きたいと考えている。森林環境教育が子供たちに与える良い影響を説明し、都市に住む子供たちも体験できる生きる力を育むためのプログラム作成に尽力したい。

（別紙６－２）

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

【研修参加者】

所 属（学部（研究科）・学年）：農学部・４年

氏 名：前野一純

授業科目名	国際森林論

１．研修先での学習内容及び自身の学習成果について記載して下さい。（250～300字程度）

ドイツの森林管理や林業の様子、里山地域で暮らす人々の様子などについて学んだ。ドイツの森林管理は、日本と比べて、先の森林のことを見通してより多くのことを考えながら丁寧に施業を行っていると感じた。また、実際に伐採現場を見学して、地形、気候、使用する林業機械、現場の人の働き方など、ドイツの林業と日本の林業の違いや共通点を知ることができた。特に、伐採現場で使われている林業機械が印象的だった。日本で一般的に使われているものよりもとても大きく、機械に備え付けられている設備（前照灯など）も想像以上に先進的で驚いた。

２．現地での生活を体験して得た気づきや学びを記載して下さい。（250～300字程度）

ドイツでの生活を体験して特に印象に残ったことは、日本と比べて、飲料水があまり自由に飲めないということである。日本では、豊富な水資源と水処理技術により、安価で飲料水を手に入れることができる上に、多くの場所で水道水を飲むこともできる。一方、ドイツでは、硬水で飲みにくいことなどにより、水道水を飲むことは少なく、スーパーで売られているペットボトル飲料水を買ったり、炭酸水を飲んだりする（炭酸飲料を好む人が多いというお話も聞いた）ことが多いということが分かった。日本で生活していると当たり前のことだと感じているものも、実はとても貴重で有難いことなのだと思った。

３．研修前と後での自身の変化や最も成長した経験について具体的なエピソードをもとに記載して下さい。（250～300字程度）

現地での講義を通して、日本の森林・林業だけでなく、海外の森林・林業の状況や働き方についての関心が高まったと思う。また、現地のお店での買い物や食事、公共交通機関を利用しての移動などで、現地の人と英語で会話することが多々あった。英会話に自信がなかったため、はじめの頃は会話する機会を避け、会話する際も小さな声で話していた。しかし、何度か会話をするうちに、拙い英語であったとしても、笑顔で元気よく伝えようと努力すれば何とか伝わるということが分かった。研修の最終日には苦手意識も薄れ、自分から積極的に話かけられるようになった。苦手なことであったとしても、逃げずに挑戦することは大事だと思った。

４．地域社会の発展に寄与するため、今後取り組んでいきたいこと、自身の目標について記載して下さい。（250～300字程度）

研修を通して、自分が学んでいる分野の事柄だけでなく、国内外の様々な事柄についてもっと学びたいと考えるようになった。研修の中で見聞きし感じたことを、まずは自分の専門分野で何か活かすことはできないか考え、日本や地域の森林・林業をより魅力的なものにすることができるよう考えていきたいと思う。また、専門分野以外の事柄についても興味を広げ、多角的に物事を見ることができるようになりたいと思う。そのために、少しでも気になったことや興味を持ったことについて調べ掘り下げたり、新聞を日常的に読むなど、世の中の動きや話題になっていることについて知り、自分は何をするべきか常に考える習慣をつける必要があると考える。